

氏名	遠藤 英樹 (えんどう ひでき)
学位の種類	博士 (観光学)
報告番号	乙第368号
学位授与年月日	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	ツーリズム・モビリティーズの社会理論 —— 観光社会学の深化と刷新を志向する理論研究——
審査委員	(主査) 高岡 文章 (立教大学大学院観光学研究科教授) 大橋 健一 (立教大学大学院観光学研究科教授) 千住 一 (立教大学大学院観光学研究科教授) 須藤 廣 (法政大学大学院政策創造研究科教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

第1章 本論文の目的・方法・構成

第1節 本論文の目的——「観光学」「観光社会学」「ツーリズム・モビリティーズの社会理論」の関係

第2節 グローバルなモビリティーズが帰結させる5つの状況

第3節 本論文の研究方法及び構成

第I部 観光社会学を深化させるツーリズム・モビリティーズ研究

第2章 「観光社会学」の対象と視点——再帰的な「観光社会学」へ

第1節 「観光社会学」の対象

- (1) ツーリストの分析
- (2) 地域住民の分析
- (3) プロデューサー（観光を制作する者）の分析
- (4) 相互関係の分析

第2節 観光のオーセンティシティをめぐる視点

- (1) D. J. ブーアスティンの視点
- (2) D. マキアーネルの視点
- (3) ポストモダニズムの視点
- (4) 構築主義の視点

第3節 視点の社会的編成——再帰的な「観光社会学」へ

第3章 ツーリズム・モビリティーズ研究の意義と論点

第1節 モビリティーズの時代

第2節 人文・社会科学の「移動論的転回 (mobility turn)」へ

第3節 ツーリズム・モビリティーズ研究の意義

第4節 ツーリズム・モビリティーズ研究における近年の論点

- (1) パフォーマティヴィティ (パフォーマンス性)
- (2) マテリアリティ (物質性)
- (3) リフレクシヴィティ (再帰性)

第Ⅱ部 ツーリズム・モビリティーズと文化

第4章 モビリティ時代におけるポピュラーカルチャーと観光——観光と接続されるポピ

ュラーカルチャー

第1節 既存のポピュラーカルチャー研究

- (1) ポピュラーカルチャーの「表象 (representation)」論
- (2) ポピュラーカルチャーにおける「表象 (representation) と社会との関係」論
- (3) ポピュラーカルチャーの「メディア」論

第2節 ポピュラーカルチャーにおけるソフト・パワーと観光

- (1) ポピュラーカルチャーにおけるソフト・パワー
- (2) ポピュラーカルチャーに誘発される観光

第3節 観光によって変容するポピュラーカルチャー

- (1) ポピュラーカルチャーの観光性
- (2) 融解する想像力
- (3) 文化産業における空間への着目

第5章 トランスナショナルな文化を形成する観光——脱TDR化する東京ディズニーリ

ゾート

第1節 東京ディズニーリゾートという観光地

第2節 「シミュレーション」の世界

第3節 「シミュレーション」と「リアルな仕掛け」のメビウスの輪

第4節 「文化帝国主義」論を越えるディズニーリゾート

第5節 トランスナショナルなダッフィー——モノが歩く世界

第Ⅲ部 ツーリズム・モビリティーズと地域

第6章 モビリティーズの中の「合わせ鏡」の中に映る地域アイデンティティ——「よさ

こい祭り」を事例とした「伝統の転移」に関する考察

第1節 観光における「伝統の変容」と「伝統の創造」

第2節 「伝統の転移」とは何か——「よさこい祭り」を事例に

第3節 「合わせ鏡」に映る鏡像としての地域アイデンティティ

第4節 地域アイデンティティのモバイル化——「オリジナルなき世界」を拡張する観光

第7章 ツーリズム・モビリティーズの文脈において構築される地域の記憶——いくつか

の「ダークツーリズム」の事例を通じた考察

第1節 「ダークツーリズム」の分類

- (1) 訪問される場所による分類
- (2) 濃淡による「ダークツーリズム」の分類

第2節 「ダークツーリズム」において構築される地域の記憶

- (1) “人間の歴史”というフィクションの実定化
- (2) 観光されるべき「ダークネス」の構築

第3節 「ダークツーリズム」による他者の“死”や“苦しみ”の理解不可能性

- (1) モバイルな社会を生きる現代人を駆動する「死の欲動」
- (2) “死”や“苦しみ”に対するまなざしの暴力性と商品化
- (3) 他者の“死”や“苦しみ”の理解不可能性

第4節 「他者に寄り添い共生するゲーム」という舞台

- (1) 上演される“死”や“苦しみ”
- (2) 異化効果をもたらす上演か否か

第8章 ツーリズム・モビリティーズと地域の再帰的な関係性——シンガポールの観光を

事例とした考察

第1節 観光産業に注目するシンガポール

第2節 ツーリズム・モビリティーズの文脈の中で変貌するシンガポールの地域

第3節 観光と地域の再帰的な関係性

第IV部 ツーリズム・モビリティーズ研究の再検討

第9章 変容を遂げ始める観光の意味——恋愛と観光の機能的等価性

第1節 「理想の時代」「夢の時代」から「虚構の時代」へ

第2節 恋愛という「聖なる天蓋」

- (1) テレビドラマに映し出される「虚構の時代」
- (2) トレンディドラマから純愛ドラマへ
- (3) 恋愛という「聖なる天蓋」

第3節 旅という「聖なる天蓋」

- (1) バックパッカーとは何か
- (2) もう一つの「聖なる天蓋」

第4節 モビリティーズが進化＝深化した現代の聖性

第10章 モバイル＝デジタル時代の観光——「観光の終焉」か「観光の徹底」か

第1節 現代の「社会空間」に影響をあたえるモビリティーズ

- (1) 現代の「社会空間」
- (2) モビリティーズの風景の乖離と融合

第2節 「モビリティーズの時代」における「社会空間」としてのメディア

- (1) 「社会空間」としてのデジタル・メディア
- (2) 「プラットフォーム」への着目

第3節 ツーリズム・モビリティーズを「現実」化する「プラットフォーム」

- (1) 観光現象に対する「プラットフォーム」の意義
- (2) モノが旅をするとき

第4節 「観光の終焉」か、あるいは「観光の徹底」か

第11章 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）以後の観光

——「リスクの贈与」から「歓待の贈与」への転換

第1節 グローバルな複雑性

第2節 観光を《これまでと異なるように見る》

第3節 グローバルな複雑性を利用したリスクから歓待（ホスピタリティ）への転換

第12章 結論——議論の総括

第1節 本論文における各部・各章の位置づけ

- (1) 観光社会学を深化させるツーリズム・モビリティーズ研究
- (2) ツーリズム・モビリティーズと文化
- (3) ツーリズム・モビリティーズと地域
- (4) ツーリズム・モビリティーズ研究の再検討

第2節 観光学における本論文の意義

参考文献・資料リスト

(2) 論文の内容要旨

論者によって様々な異同はあるにせよ、観光学を「観光とそれに関わる諸事象を研究対象とする学問」であるとする点においては共通するところであろう。こうした観光学はホスピタリティ・マネジメント、観光政策や観光行政、あるいは観光の経済動向分析など、多様な分野の研究に資するものである。だが同時に、これらに限定されるものではなく、観光学は観光現象を通して文化、地域など、現代社会のあり方をあざやかに映し出す学としても重要である。観光社会学は、観光学のそうした側面を担ってきた。

現代において観光現象は、人、モノ、資本、情報、知、技術等の多様なモビリティーズを産業化し、世界中をその渦の只中へと巻き込む「軸」となっている。それは、多様なモビリティーズを相互に結びつけながら組織化し、そうすることで現代的な形態へとモビリティーズを変容させると同時に、観光そのものも新たなあり方へと変化させていく。

本論文は、研究方法として観光社会学における「理論研究」を採用しながら、「観光学」の領域から始まった「観光社会学」の成果を理論的に検討する。これを通して、現代におけるグローバルなモビリティーズの特徴を映し出し、社会のあり方を明確にする「ツーリズム・モビリティーズの社会理論」を構築しようとする。そうすることで、社会それ自体がリジッドなものではなく、モバイルに揺らぎ続ける「観光的（ツーリストティック）な社会」になっていることを示す。

それは、社会が観光を軸に不確実性を増し流動化していることを問うとともに、観光そのものが社会の流動化において大きく変容し揺らいでいくことを同時に問うものである。「ツーリズム・モビリティーズの社会理論」は、社会と観光がいかにシンクロナイズし、それによりそれぞれがいかに変化しているのかを問う。そうした「問い」の探究は、観光現象を真正面から扱う観光学において可能になると考えている。このように「観光の社会学」を、「観光的（ツーリストティック）な社会」を考察する「観光社会の学」へと発展させていくことを試みた観光学的理論研究に、本論文を位置づけることができる。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

現代において、観光現象は、さまざまな移動のひとつの形態を形成するのみならず、人、モノ、資本、情報、知、技術等の多様な移動からなるハイブリッドなモビリティーズを産業化し、世界中をその渦の只中へと巻き込む「軸」となっている。観光は、多様な移動を相互に結びつけながら組織化し、モビリティーズと呼ぶべき現代的な移動の形態へと変容させると同時に、観光そのものを変容させている。このような社会状況を背景として、本論文は現代におけるグローバルなモビリティーズの特徴を描写し理論化する「ツーリズム・モビリティーズの社会理論」として構想されている。

第Ⅰ部は、観光社会学の学説史の整理と批判的検討を踏まえて、新たにツーリズム・モビリティーズの社会理論の意義と必要性を主張する基幹的な部分である。

第Ⅱ部は、文化をキーワードとし、ポピュラーカルチャーや東京ディズニーリゾートを事例に、ツーリズム・モビリティーズが文化の形をどのように再編しているのかを考察し、こんにちにおいて文化が観光や移動の影響によって、より流動的、越境的なものへと変容していることを論じている。

第Ⅲ部は、地域をキーワードとし、ツーリズム・モビリティーズが地域の形をどのように再編しているのかを考察し、観光や移動が地域の風景やアイデンティティ、記憶、歴史を再帰的に構成していることを論じている。

第Ⅳ部は、聖性、デジタルテクノロジー、COVID-19等に焦点をあてながら、現代社会における観光の変容を考察し、観光と社会との明確な境界がますます流動化していることを論じている。

これらの作業を通して本論文は、人、モノ、資本、情報、知、技術等の多様なモビリティーズに特徴づけられる現代社会の構造を理論的に明らかにしている。欧米において展開されてきた最先端の社会学、モビリティーズ研究、観光学、現代思想、哲学などの理論的業績を広く渉猟し、批判的な検討を加えながら、それらを日本の文脈に置き換えて、独自の論を主張している。

最終的に本論文は社会が観光を軸にしながらか不安定性を増し流動化しているとともに、観光そのものが社会の流動化のなかで大きく変容し揺らいでいると結論づけている。

(2) 論文の評価

観光をめぐる学問が、単に狭義の観光を対象とするだけでなく、観光の社会的な広がり

までを視野にいれながら社会そのものの変容を捉えるべきであるとの本論文の議論は射程が広く、きわめて啓発的である。海外の先進的な社会理論を踏まえつつ、観光学から観光社会学へ、さらにはツーリズム・モビリティーズの社会理論へと視点の転換を主張する本論文の議論は、日本における観光学の可能性を大きく拓くものとして、高く評価することができる。

学問上の貢献という観点からみて特に傑出している点として以下の3点を挙げることができる。①主に欧米の事例をもとに展開されてきたツーリズム・モビリティーズ研究を日本の事例と接続させながら議論を展開している点、②ラカンやヴィトゲンシュタインなどの現代思想や哲学の蓄積を観光学に応用する可能性を力強く示している点、③観光学における最も基盤的な概念である「観光」を現代社会の揺らぎのなかで捉え、その概念の再考と刷新を試みている点。

他方、日本における観光社会学の理論的展開との接続については、若干の課題を残した。また、1980年代から議論されてきたモビリティ研究と、本論文において主張されるツーリズム・モビリティーズの社会理論との関係性については、部分的に示唆されるにとどまっている。ただしこれらの課題は本論文の研究上の達成を損なうものではなく、今後の研究の可能性を示すものであるとの見解で審査委員会は一致した。